

は側頭部で $54.8 \pm 14.8 \text{ ml}/100\text{g brain}/\text{min}$ で再現性も良い。“Apallisches Syndrom” では脳血流量は減少し Willis 輪の機能不全、著明な脳萎縮の為と考えられるが他側半球への多量の交叉血流を認める。脳腫瘍では全般的に脳血流量は減少する傾向にあるが一定せず、脳圧 300 mm H₂O 台以下では血流量との相関性はない。手術侵襲、⁶⁰Co 照射は脳血流動態に対し抑制的に働く。中大脳動脈閉塞症、頭蓋底異常血管網症では局所脳血流量の減少と共に Contralateral Initial Count が重要な意義を持ち副血行路の発達の度合をも推察出来る。¹³³Xe を使用する点では Phospholipid, Fatty Tissue への溶解の問題、Two Compartment 法を脳腫瘍群に用いると腫瘍自体の組織対血流分配係数の介在が大きな問題になるが、CBFr. の絶対のみでなく Clearance Curve の Pattern, Contralateral Initial Count 等総合的判定により臨床検査としての重要性が増加する事を強調する。

9. 脳動脈閉塞の脳循環

西川秀人 富原健司 檜垣重俊 児玉 求
(広島大学 第2外科)

片麻痺及び言語障害を来たした中大脳動脈閉塞 5 例、(うち 1 例は両側中大脳動脈閉塞、1 例は対側の前大脳動脈閉塞を伴う。) 両側内頸動脈サイフォン末端部狭窄及び脳底部異常血管網を伴う 2 例、及び一側内頸動脈サイフォン部の炎症性狭窄 1 例について連続脳血管写、¹³³Xe クリアンス法による局所脳血流量測定、及び脳波により脳血行動態の検討を行った。脳動脈閉塞(或は狭窄) 時には症例により多種多様な副行枝循環の発達を認め、シルビウス氏溝を中心とする局所脳血流量は $30 \sim 40 \text{ ml}/100\text{g}/\text{min}$ (正常値 $54.8 \pm 14.8 \text{ ml}/100\text{g}/\text{min}$) と低値を示し、脳循環時間は延長する傾向があり、脳波上は患側半球において徐波化を認めた。そしてこれらと神経症状との間にある程度の相関関係があるように思われ、今後症例を追加し検討して行きたいと思っている。

演題 9

質問：佐藤宏二(岡山大学脳外科) 血管閉塞症の側副血行を認めた時期と局所脳血流量の増加の時間的な関係はどうでしょうか。

答：西川秀人(広島大学第2外科) 症例は全例急性期を過ぎた症例で発作直後からの経過を追った観察については今後検討して行きたい。

10. 肝シンチグラム及び肝シンチカメラによる肝硬変症及び肝癌の形態的、発生学的考察並びに肝機能検査との関係について

松田健一 川上広育 甲斐 嵩
杉屋武司 柚木 宏
(広島大学 浦城内科)
湯本泰弘
(岡山大 小坂内科)

慢性肝炎、肝硬変症及び肝癌における肝シンチグラム所見について統計的観察を行い、得られた所見と肝機能検査との関連性について考察した。

先ず 47 例の正常肝についてこれを形態的に右葉を主体とした基本型 (46.8%)、左葉発育型 (27.7%)、左葉発育延長型 (10.6%)、左葉萎縮延長型 (4.3%)、右葉萎縮左葉発育型 (6.4%) の 5 型並びに変形 (4.3%) に分類したが、慢性肝疾患では、慢性肝炎 18 例中基本型 27.8%、肝硬変症 30 例中 16.7% と減少し、右葉萎縮の像を示し、更にかかる正常肝の分類に入らない変形像がかなりの比率で出現する事が特徴的であった。特に肝硬変症においては 26.7% に出現し、形態的に右葉左葉肥大延長型、右葉左葉高度萎縮型の出現が特徴的であった。又一定条件のスキャン操作によって正常肝は常に良好な ¹⁹⁸Au の摂取状態を示すが同じ条件において肝疾患は屢々摂取率が低下する。正常肝を対照とした場合、慢性肝炎では 11.1%、肝硬変症では 40% に低下例がみられた。又正常肝では骨髓像は出現しないが、慢性肝炎では 11.2%、肝硬変症では 36.6% に出現した。肝の大きさについては正常肝でも一定しないが、特に慢性肝炎では萎縮像 27.8%、腫大像 38.9%、肝硬変症では萎縮像 36.7%、腫大像 23.3% であった(正常大省略)。肝癌では原発性、転移性併せ 14 例中、12 例が腫大像を示した。脾影の出現については臨上これを I 度から IV 度に分類したが、(I < II < III < IV 度) 慢性肝炎では I 度 55.6%、II 度 5.6%、III 度 11%、肝硬変症では I 度 13.3%、II 度 30%、III 度 30%、IV 度 16.7% であった。肝癌では原発性肝癌において脾影の出現は著明であった。この様に臨上肝障害の程度と肝シンチ所見とは有意の相関性を示したが、更に肝機能検査とこれらの種々の所見との関連性について肝硬変症 30 例について検討した結果、¹⁹⁸Au 摂取率低下を示す肝硬変群と良好な摂取率を示す肝硬変群では、摂取率低下群の方が肝障害の程度が強かった。骨髓像の出現の有無では特に肝機能上の差は認められなかった。脾影出現せ